

Title	アカデミア・フィオレンティーナの誕生：君主国家下におけるフィレンツェ文化の様相
Sub Title	La nascita dell' Accademia Fiorentina : la cultura fiorentina sotto il principato mediceo
Author	北田, 葉子(Kitada, Yoko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1996
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.65, No.4 (1996. 6) ,p.59(383)- 88(412)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19960600-0059">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19960600-0059</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# アカデミア・フィオレンティーナの誕生

——君主国家下におけるフィレンツェ文化の様相

北田 葉子

## 序

一五三〇年八月十二日、十カ月に及ぶ皇帝軍の包囲に耐えた後、終にフィレンツェ共和国は降伏した。皇帝カール五世と手を結んだメディチ家の教皇クレメンス七世は、彼の庶子といわれるアレツサンドロにフィレンツェ公の称号を与え、ここにフィレンツェ公国が誕生し、フィレンツェ共和国の歴史は終りを告げた<sup>(1)</sup>。

共和国は最終的に皇帝軍によって終焉させられる前から、既に危機的な状況を呈していた。ロレンツォ・イル・マニフィコが死んだ一四九二年から共和国が終焉する一五三〇年までのフィレンツェの歴史は、混乱に満ちている。ヨーロッパの大君主国の時代にあつて、フィレンツェはもはや微力な小国に過ぎず、国内政治も国外情

勢に大きく左右され、フィレンツェ人の中にも自分たちの弱さについての自覚が広がつていった<sup>(2)</sup>。またフィレンツェ内部では、君主の地位を狙うメディチ家、寡頭政治を狙う貴族層<sup>(3)</sup>、それに対して政治に参加する権利を要求する中流階層らの争いが、安定した政権をつくることを困難にし、政権はこの四十年ほどの間に三回も変わった。このような状況の中で、かつては君主国ミラノ公国に対して共和国の自由を誇り、その自由を礼賛したフィレンツェも終に君主国とならざるを得なかつたのである。しかし君主制の導入が反発を伴わなかつたわけではない。実際フィレンツェでも、最初にフィレンツェ公となつたアレツサンドロは、その暴君的態度で市民の反発を招き、その結果多くの市民が亡命し、フィレンツェ公国の敵となつた。しかしこのアレツサンドロは、正式に即位して

からわずか五年後の一五三七年一月に暗殺され、彼を継いだメデイチ家傍系の出のコジモ一世に、君主国の整備という仕事<sup>(4)</sup>が任されることになったのである。

コジモ一世は、敵対する亡命者を打ち破り、安定を欠いていた政府機構を絶対主義的な枠組みによって建て直した。中央集権体制を作り、官僚制度を整え、領域国家トスカナ大公国を作り上げ、一五三〇年の包囲以来悲惨な状況にあつた国土の復興に努めた。当時既にミラノやナポリを支配下に収めていたスペインの脅威から国の独立を守り、あまつさえ領土も拡大させた。かつての栄光は取り戻せず、長期的に見れば漸進的衰退にあつたとはいえ、経済的にもフィレンツェは再び安定を取り戻した。四十年余の混乱の時代を経て、フィレンツェには再び平和が訪れた。コジモの即位以後、メデイチによる支配は二百年間揺るがず、国土が外国勢力によって蹂躪されることもなかった。

文化面にもコジモは配慮を忘れなかった。アレッサンドロの暴君的態度に反発して、文化のパトロンとなりうる多くの有力市民、知識人、芸術家が市を去っており、文化と芸術の都としてのフィレンツェの地位も放棄されていたが、コジモは亡命者の多くがフィレンツェに帰還

するのを許し、また積極的に奨励もした。文化的にもかつての栄光には及ばなかったが、少なくとも再びフィレンツェは文化の中心地の一つとなった<sup>(4)</sup>。しかしそれはコジモ以前の共和国の下での文化とは異なる様相を帯びていた。コジモの「絶対主義」<sup>(5)</sup>については、近年共和国時代との連続性が指摘されているが、文化面においてはかなり顕著な変化がコジモの統治の初期から見られる。建築の分野では、君主国への変化は新しい都市の建設や要塞の構築を初めとする大規模な計画、ウフィッツィに代表される新しい公的な建物、メデイチ家の別荘などの君主の私的な建物の建築などに現れているし、<sup>(6)</sup> 絵画や彫刻は君主国の政治的プロパガンダの道具として非常に効果的に利用された<sup>(7)</sup>。大学は官僚の養成所となり、知識人、芸術家はアカデミアを通して管理された。コジモの文化政策とフランスの太陽王ルイ十四世のそれとは多くの類似が見られるという<sup>(8)</sup>。

このコジモは統治のかなり初期に、後の文化政策の基本となる事業を三つ行なったといわれている。一つは一五四一年にアカデミア・デッリ・ウーミディを改組してアカデミア・フィオレンティーナを設立したこと、もう一つは一五四三年のピサ大学の復興、三つめは一五四七

年に実現した国立印刷所の設立である。<sup>(9)</sup> その中でも誕生して数カ月のアカデミア・デツリ・ウーミデイがアカデミア・フィオレンティーナと改名され、後に国家的な文化機関となったことは、コジモの文化政策の本質をよく示すものとして、従来から関心を集めている。

ウーミデイ／フィオレンティーナについては、かなり詳しい史料が残されている。ウーミデイについては、規約や彼らの書いた詩を含む手稿があるし、フィオレンティーナについては、彼らの活動を克明に記した記録が残されている。<sup>(10)</sup> 研究も多く、一七〇〇年代にまだ存続していたアカデミア・フィオレンティーナの会員によって書かれた二つのアカデミアの歴史を初め、イタリアのアカデミア全体にわたるマイルレンダーの研究、サネージの研究、近年ではマッツァクラータイ、デイ・フィリッポ・バレッジ、プレツサンス、ベルテツリ、デ・ガエターノ、ヴァゾーリらが、このアカデミアについての論文を発表している。<sup>(11)</sup> また直接のモノグラフではないが、このアカデミアについて言及した研究者も数多い。<sup>(12)</sup> 近年、コジモ一世時代の研究の進展と共にアカデミアの研究も進み、特にコジモの絶対主義的文化政策とアカデミアの関連に焦点が置かれているが、その研究の中でも最高峰

アカデミア・フィオレンティーナの誕生

に位置付けられているのは、プレツサンスの研究である。彼はアカデミアの変遷そのものを研究対象とし、それまで顧みられなかった一次史料を駆使して、設立から一五五一年までのアカデミアの歴史を再構成した。彼の研究は非常に高く評価されるべきものであるが、しかしながら問題がないわけではない。プレツサンスは、ウーミデイからフィオレンティーナへの変遷を、絶対君主（＝コジモ一世）対共和制支持者（＝ウーミデイの創立者達）という政治的対立に還元した。しかしこのように単純な対立の図式化は危険であり、この危険性は、プレツサンスのよりドラマチックに史料を解釈する傾向によって、増しているように思われる。<sup>(13)</sup> 更にプレツサンスは、当時の社会や階級といったものの重要性を主張しているにもかかわらず、<sup>(14)</sup> 「ブルジョワジー」という言葉をフィレンツェ社会に無理やり当てはめるといふ非常に重要な基本的な誤りを犯している。<sup>(15)</sup> 従って本論では、プレツサンスの見解を訂正しつつ、ウーミデイからフィオレンティーナへの変化を見直していくことにする。

(1) 十五世期末から十六世紀にかけてのフィレンツェの歴史については、以下を参照。R. Von Albertini, *Firenze*

- dalla repubblica al principato, storia e coscienza politica, tr. C. Cristofolini, Torino, 1970; F. Gilbert, *Machiavelli and Guicciardini: Politics and History in Sixteenth-Century, Princeton*, N. J., 1965. またフイレンツェ公国(一五六九年以後はトスカナ大公国)の歴史については以下を参照。A. Anzilotti, *La Costituzione dello Stato fiorentino sotto il Duca Cosimo I de' Medici*, Firenze, 1910; E. Cochrane, *Florence in the Forgotten Centuries (1527-1800)*, Chicago and London, 1973; F. Diaz, *Il Granducato di Toscana. I Medici*, Torino, 1976; R. Galluzzi, *Istoria del granducato di Toscana sotto il governo della casa Medici*, Firenze, 1781; G. Spini, *Cosimo I e l'indipendenza del principato mediceo*, Firenze, 1980.
- (2) Cf. Albertini, *op. cit.*, pp. 39-44, F. Gilbert, *Machiavelli and Guicciardini*, pp. 45-48.
- (3) ハリゴロい貴族とは、封建貴族ではなく、いわゆる都市貴族で、商業、銀行業で富をなし、共和国下で公職を歴任した家を指す。従って彼らは貴族として法制化されず、おらず、また何らかの特権を持っていたわけでもない。彼らは君主国家になって、徐々に官僚制の中に組み込まれていくことになる。Cf. 松本典昭「トスカナ大公国の貴族層」『日伊文化研究』二十九号(一九九一年)百四一-百二十四頁、R. B. Litchfield, *Emergence of Bureaucracy: The Florentine Patricians, 1530-1790*, Princeton, 1986.
- (4) ロジキの時代の文化全般については以下を参照。Cochrane, *op. cit.*, pp. 67-87, Diaz, *op. cit.*, pp. 201-229.
- (5) Cf. 松本典昭「十六世紀におけるフイレンツェ公国の政治構造」『イタリヤ学全集』四十号(一九九〇年)一〇五-一一一六頁、E. Fasano Guarini, *Lo stato mediceo di Cosimo I*, Firenze, 1973; R. B. Litchfield, *op. cit.*
- (6) Cf. G. Spini, "Introduzione generale", in *Architettura e politica da Cosimo I a Ferdinando I*, a cura di G. Spini, Firenze, 1976, pp. 9-77.
- (7) Cf. 松本典昭「ピランツォ・ヤンツキオの五百人広間の天井画を読む」『日伊文化研究』三十号(一九九二年)六十九-八十五頁、K. W. Forster, "Metaphors of Rule. Political Ideology and History in the Portraits of Cosimo I de' Medici", in *Mitteilungen des Kunsthistorischen Institutes in Florenz*, vol. 15, 1971, 65-104; W. C. Kirwin, "Vasari's Tondo of Cosimo I with his Architects Engineers and Sculptors' in the Palazzo Vecchio", in *Mitteilungen des Kunsthistorischen Institutes in Florenz*, vol. 15, 1971, 105-122.
- (8) Albertini, *op. cit.*, p. 290; Spini, "Introduzione generale", p. 62.
- (9) ロジキの時代のピサ大学については、N. Carranza, "Lo Studio di Pisa nel principato mediceo", in AA. VV., *La nascita della Toscana*, Firenze, 1980, pp. 65-72; D. Marra, *L'Università di Pisa come Università statale nel Granducato mediceo*, Milano, 1965; G. C. Pratelli, *L'Università e il principe*, Firenze, 1975, pp. 119-135; C. B. Schmitt, "The Studio Pisano in the European Cultural Context of



32 ("Une première affirmation", p. 410)。

- (14) Plaisance, "La structure de la beffa dans les Cene d'Antonfrancesco Grazzini", in *Formes et significations de la «beffa» dans la littérature italienne de la Renaissance*, Paris, 1972, p. 57.

- (15) プレッサンスは、フィリッポ・ストロツツイのような大商人貴族をブルジョワジーとする一方で、ラスカの職人などの民衆を舞台にした文学を「ブルジョワジー的」であるとしているし、またブルジョワジーの文化とは「権力を独占するいくつかのファミリーのまわりに形成された宮廷の文化」に対立するものであるとしている。Cf. Plaisance, "Une première affirmation", p. 370; "La structure de la beffa", p. 53.

### 一 アカデミア・デツリ・ウーミディ

十五世紀に始まり、十六世紀半ばから十七世紀に最盛期を迎えるイタリアのアカデミアを定義するのは難しい。イタリアのアカデミアを明確に定義し、分類しようとする試みもあったが、その多様さをカバーしきれず、現在では批判を浴びている。<sup>(1)</sup> あえて定義するとすれば、それは知的欲求を満足させるための知識人の集まりであり、現代まで続くいわゆる「アカデミー」の遠い祖先であって、大学ではカバーできない分野でその代わりを果たし

た、知識人達のセンターであった。最初のイタリアのアカデミアは、マルシリオ・フィチーノが、コジモ・イル・ヴェツキオとロレンツォ・イル・マニフィコの二代にわたるメディチ家の保護のもとにつくったアカデミア・プラトニカだといわれているが、このアカデミアはプライベートな集まりで、フィチーノ個人をめぐる友人関係が会の基礎であった。<sup>(2)</sup> アカデミア・プラトニカ以後、フィレンツェにはルチエツライ家が主宰したオルティ・オリチェツラーリや、<sup>(3)</sup> レオ十世が庇護したサークラ・アカデミア<sup>(4)</sup>などがある。これらのアカデミアも友人たちの集まりという要素が強く、中心となる人物の死後も長く続くことはなかった。しかし十六世紀の初めに、その後アカデミアの原型となる、より組織的なアカデミアが出現し始める。規約、会長や書記などの役職を持ち、会合や会員による講演・演説などを定期的に行なうアカデミアである。これらの制度を供えた最初のアカデミアは、シエナのアカデミア・デツリ・イントロナーティだといわれているが（一五二五年設立）、<sup>(5)</sup> それに遅れること十五年して、フィレンツェにもこのようなアカデミアが誕生した。アカデミア・フィオレンティーナ（以下フィオレンティーナと略）の前身であるアカデミア・デツリ・

ウーミデイ（以下ウーミデイと略）である。イタリアのアカデミアが全盛期を迎え、多くのアカデミアが乱立するようになる前に生まれた、いふなればアカデミアのはしりであった。

ウーミデイは、四カ月足らずしか存続しなかった短命なアカデミアだった。発足したのは一五四〇年十一月一日で、一五四一年二月十一日には、フィオレンティーナと改名されてしまうからである。ウーミデイとは「湿った」という意味であり、フィオレンティーナの記録によると、「何物も湿気なしにはこの世に生まれ得ないことを考えて」この名がつけられたとされていることから、<sup>(6)</sup>当時広く普及していた新プラトン主義と結び付けて解釈する研究者もいるが、<sup>(7)</sup>ここでは、ウーミデイの半年ほど前に設立されたパドヴァのアカデミア・デツリ・インフィアンマーティイの影響を考へるべきであろう。<sup>(8)</sup>インフィアンマーティイとは、「燃え上がった」という意味であり、この名は、ヘラクレスが火に体を焼かれたが、その灰は天に昇り彼は神的なもの、不死なるものになったという神話にちなんだものとも（インフィアンマーティイのシンボルはヘラクレスである）、また勉学への欲求に「燃え上がった」者の集まりであることを示すものとも

言われるが、<sup>(9)</sup>これにちなんで「湿った」を意味するウーミデイという名がつけられた可能性は高い。インフィアンマーティイについては後述するが、このアカデミアで活躍していたフィレンツェ人の文学者、ベネデット・ヴァルキを、ウーミデイのリーダーであるアントンフランチェスコ・グラッツィーニ、通称ラスカ（以下ラスカ）が非常に尊敬していたからである。

ウーミデイの創立メンバーは十一人、活動の中心になつていたのは、ラスカ（一五〇三—一五八四）<sup>(10)</sup>、彼は多くの諧謔詩や喜劇、デカメロンの流れを汲む小説『レ・チエーネ』で有名な文学者である。彼には職人や商人といった一般民衆の生活を描いた作品が多く、当時の民衆の生活を伝えるという点では、「十六世紀にフィレンツェを描写した者の中で、グラッツィーニに匹敵する者はおそらくいない」といわれるほどである。<sup>(11)</sup>しかし彼の本格的文学活動はアカデミア設立以後であり、一五四〇年以前の作品はほとんど残されていない。論争好きで相手を容赦なく攻撃し、多くの敵を持つていたことでも知られ、また裕福な家柄の出身ではなく、公証人の息子で、若い頃からずつと叔父の薬屋を手伝っていたといわれている。<sup>(12)</sup>ラスカが受けた教育については知られてい

ないが、少なくともしつかりしたラテン語教育を受けていないことが、彼自身の証言から知られている<sup>(13)</sup>。

ウーミデイのパトロンの存在としては、ジョヴァンニ・ストラディーノがおり、彼が会合場所として自宅を提供し、彼の貴重な古文書や書籍を他のメンバーに貸し与えていた<sup>(14)</sup>。彼は容貌怪異な上、「巨人の歯」「死人の乾し首」といった珍奇なものを集め、それを身につけるのを好んだため、非常に奇矯な人物として知られ、またコジモ一世の父で傭兵隊長であった黒旗のジョヴァンニの兵士であったという縁で、コジモの庇護を受けていた<sup>(15)</sup>。しかし、ウーミデイが設立されたときには既に六十代に達し、政府には何の役職も持つておらず、また名門の出身でもなかったため、力のあるパトロンとしてウーミデイを引き立てることはできなかった。

「二流の詩人」だが野心家で、パトロンを求めて詩を送り続けたニッコロ・マルテッリを含め、その他九人がウーミデイの創立メンバーであるが、他の八人については詳しいことはわかっていない<sup>(17)</sup>。彼らは当時のフィレンツェ知識人というよりは、より一般民衆、すなわち職人や小規模な商人達といった中下層階級に近い存在であった。そのことは、メンバーの多くが小規模な商業活動に

携わっていたということからも分かるし、リーダーであるラスカがラテン語を苦手とし、日常的な話題を題材とした諧謔詩や喜劇を専ら活動の中心にしていることから分かる。またウーミデイ自体が、それ以前のアカデミアとは違って、貴族といえるような家柄の出身者を持たず、強力なパトロンも持たなかった（あるいは持てなかった）こともそのことを証明するものと思われる。また何よりウーミデイの活動がほとんど詩の執筆にだけ限られており<sup>(19)</sup>、しかもアカデミアの目標が「気晴らし」である<sup>(20)</sup>と規定されていることは、彼らの民衆的伝統を示すものである。当時のアカデミアで、このような目標を掲げているものは全く知られていない。シエナのイントロナーティは、この世の俗事から逃れてあらゆる自由学芸の研究にいそしむことを目的としていた<sup>(21)</sup>、またインフィアンマーティは全ての知をイタリア語に翻訳することを目指していた<sup>(22)</sup>。またギリシャ古典を中心にしたアルド版などの本の出版・印刷で名高いアルド・マヌツィオが、工房に集まる人々と共につくったアカデミア（一五〇二年頃にヴェネツィアで設立）でも、あらゆる学問を研究し、それを出版することを目標としていた<sup>(23)</sup>。このように全ての知を追求しようという姿勢は、ピコ・デッ

ラ・ミランドラやポリツィアーノ以来の伝統的なルネサンスの知識人の考え方であり、その後十六・十七世紀になっても、多くのアカデミアがこの伝統を受け継いでいたのである。<sup>(24)</sup> しかもウーミデイのメンバーは、リーダーであるラスカがラテン語が得意ではなかったことから考えて、明らかに他のアカデミアに比べて教養のレベルが低かった。ウーミデイは、デイ・バレツジの言葉を借りれば、「もしコジモの治世に誕生しなかったら、そしてもしコジモがすぐにそれをつぶしてしまわなかったら、研究者の注意を引くことはできなかつたであろう」ようなアカデミアであつた。<sup>(25)</sup>

しかしプレッサンスは、ウーミデイに別の特徴を付与した。彼は、ウーミデイを「商人ブルジョワジーの文化面での代弁者」(*porte-parole culturels de la bourgeoisie marchande*)<sup>(26)</sup>で、共和制を支持して、「権力の鉄の手」で自由を奪う絶対君主コジモに対立する者たちの集まりであるとした。<sup>(27)</sup> これは新しい主張であり、これまでウーミデイを政治思想と結び付けた研究者はいなかつた。しかしこのような図式化は、非常に危険であり、単純すぎるであろう。なぜならまず当時のフィレンツェの状況自体が、「自由対専制」という図式には収まらないからで

アカデミア・フィオレンティーナの誕生

ある。十五世紀の末から不安定な政権と外国の脅威に脅かされてきたフィレンツェでは、「君主」の存在は決して単なる自由の敵ではなかつた。「君主」は、貴族と中流階層の争いで常に不安定な共和制を終らせて、安定した政権をもたらしたし、また外国からの脅威も、皇帝という強力な保護者の存在によつて押えることができたからである。一五三二年に君主制がフィレンツェにもたらされたとき、多くの貴族が反対しなかつたのもそのためである。それほど彼らは平和を求めていた。アレツサンドロが、共和国の終焉を象徴するといわれる要塞、フォルテツァ・ダ・バツソをフィレンツェ市内に建設した時も、多くの貴族がそれに反対しようとはしなかつたのである。<sup>(28)</sup>

「自由」の概念自体が徐々に変わり始めていた。グイッチャルディーニは、それまでの政体の「自由」、政治参加への「自由」という概念を、平等な法によつて平和と安全を保証された個人こそが「自由」である、という主張に置き換えた。このような変化は、君主国の理論化の第一歩をしめすものであるが、それと同時に、当時どれほど安定や平和が求められていたかを表すものであろう。<sup>(29)</sup> 「自由」という言葉はまた、「外国の勢力からの独

「立」という意味でも使われていた。<sup>(30)</sup>そしてこの「自由」を与えることができたのも君主であった。またある者は「自由」に何らかの意味を与えることさえ放棄し、「この世の歴史の展開には、意味も目的もないのだから、このように暗い色で染められた世界を前にして、人は慣れ、適応するように努力し、まだ許されている個人の幸せや、文学や芸術と言った楽しみを享受するしかないのだ」と考えた<sup>(31)</sup>。もちろん貴族たちは、君主制を容認する別の、もっと利己的な理由も持っていた。彼らは一五二七年から一五二九年の最後の共和制で彼らを迫害した中流階層を恐れていた。貴族も中流階層も、求めるのは共和制であったが、どちらの側も自分達が権力を握ることができる共和制を求めていた。しかし最後の共和制は、中流階層と手を結ぶことは不可能だということを貴族たちに分からせた。単独で政権をとれない以上、貴族は自己の利益のためにも、メデイチと手を結ぶしかなかったのである。

このような状況下では、「自由対専制」という枠組みは十分に機能しない。確かにまだ多くの者が、純粹に共和国の自由を信じ、君主制に反対していた。しかしその多くは中流階層で、最後の共和国に参加し、メデイ

チの帰還とともに国外へ亡命していたのである。その後のアレッサンドロの専制によって、更に多くの共和主義者が亡命していた。従ってフィレンツェに残っていたものは皆、少なくとも何らかの形でメデイチによる君主制と折り合いをつけたものであり、少なくとも表立って反対するものはいなかった。君主国はもはや「<sup>(32)</sup>不可避免的な選択」として承認するしかないものであった。

しかしプレッサンスは、ウーミデイのメンバーを共和派と結び付ける具体的根拠として、ある史料をあげている。それは一五三六年六月二十四日に出された、現在の警察組織に相当する監視と警護の八人会の決定の記録である。この記録は財産を没収されるべき人物のリストであるが、その一人にラスカがあげられているのである。<sup>(33)</sup>その史料には、正確には、七十九人のフィレンツェ人の財産を没収するために、財産目録をつくるという決定が記されている。記されている七十九人の筆頭には、当時アレッサンドロと決定的に決裂した、フィレンツェ人亡命者達のリーダー、フィリップ・ストロツィがおり、また七十九人の中に多くの共和主義者が含まれていることから、プレッサンスはこの史料を、ラスカと反メデイチグループとのつながりを示すものだと考えている。<sup>(34)</sup>

しかしこの史料は、なぜ彼らが財産没収の罪に問われるかについては全く触れていない。また確かにこのリストには共和制主義者として知られているものが多くあげられているが、名前をあげられている七十九人中、四十四人は亡命するか、あるいは最後の共和制を支持することによって、公然とアレクサンドロの君主制に反対しており、明らかにラスカとは立場が異なっている。ラスカは亡命していないし、また積極的に最後の共和制を支持してもいない。

ではなぜここにラスカの名前があげられているのか。残念ながらそれを説明する史料は残されていない。しかしこの半数以上が亡命者のリストの中にあげられているからには、やはり反メデイチ、あるいは共和制主義者の取締りに関係があると見るのが妥当であろう。プレツサンスは、ラスカが亡命者と書簡のやり取りをしているのが当局に知られてしまったためではないかと考えている<sup>(35)</sup>。確かにこの可能性は高い。というのは、ラスカは一五三六年四月二十九日、カール五世のフィレンツェ入市について記した書簡を、ローマのベルナルド・グアスコーニに送っているのであるが、<sup>(36)</sup>同じグアスコーニ族であるジョヴァツキーノ・グアスコーニは一五三〇年に共和制

主義者として追放され、ラスカの載っているリストにも名前を連ねているのである。この書簡自体に政治的なものを窺わせる節は全くなく、ただカール五世がどこを通つて、どのように歓迎されたが書き連ねてあるだけだが、皇帝について書き送ったことと、送り先が反メデイチの共和制主義者の一族だったことで、疑われる可能性はあつただろう。またこの書簡ではなくても、今は失われた他の書簡で疑われたとも考えられる。実際亡命者との書簡のやり取りは、当時非常に危険であつた。それは一五三七年、コジモの治世になつてから出された、一五三〇年以後追放刑を受けた者の赦免を定めた法からも分かる。そこでは、「追放者、反徒、罪人達と交際した者、あるいは話をした者、あるいは何らかの方法で交渉を持った者に対する大きな偏見」<sup>(37)</sup>に触れており、これらの者を赦免することが明記されている。従つてラスカが共和制主義者と連絡をとつていたために、財産没収の刑を受ける者のリストに載せられた可能性は高い。しかしそれは、ラスカが共和制主義者であつたことを意味しないのである。単に友人の中に共和制主義者がいたというだけであつて、そういうことであれば、多くのフィレンツェ人がフィレンツェにおいて君主制を容認しながら、友

人である亡命した共和国主義者に連絡をとっていたはずである。<sup>(38)</sup>

実際ラスカが共和制を支持していたとする証拠は存在しない。反対にラスカがコジモと対立するつもりがなかったということは、明らかである。というのはコジモの治世になり、ウーミデイをつくると、ラスカはウーミデイがコジモの庇護を得るために、多くのコジモを讃える詩を書いているからである。<sup>(39)</sup> しかも一五四一年二月、コジモの名の下に行なわれた改名を伴うアカデミアの改革に抵抗を示しながらもお、彼はコジモから庇護をえる望みを捨てていない。彼は、改名に関してコジモの意向を質すようアカデミアから依頼されたピッコ・コロナにソネットを書き、「せめて名前だけは残るよう努めてくれ」と嘆願しているのであるが、これは彼がコジモを公正な審判者と見なしていることを示すものである。<sup>(40)</sup> またこの嘆願が失敗に終わった後も、彼はコジモを讃える詩を書くのをやめていない。その後アカデミアは更に改革されるのであるが、ラスカは常にコジモに保護を求めようとしている。ラスカにとつて敵は、君主に象徴される権力ではなく、自分がつくったアカデミアを徹底的に変えてしまった新しい会員達であった。ラスカはその後

長い間彼らと対立し、結局アカデミアを退会させられてしまうのであるが、<sup>(41)</sup> 本稿ではこれらの争いには触れることはできない。ただラスカには、君主制に進んで順応しようとする傾向があったのは明らかであると言えよう。

一五四一年の改革に抵抗して、改名を防ぐために嘆願のソネットを書いたラスカでさえ、コジモとは対立しようとしていなかったのであるから、他の会員については、言うまでもないであろう。彼らが共和制の支持者であったと疑わせるようなものは何もないし、もちろんラスカが載っていたリストにも彼らの名前はない。ラスカも含めたウーミデイのメンバーは、一団となってコジモの庇護を得ようとしていたのである。実際ウーミデイの記録には、アカデミアの設立後すぐに書かれたと思われる「庇護を請うために令名高きコジモ公爵閣下に宛てられた」四篇のソネットが残されており、ラスカの他にも三人の会員が詩を書いている。<sup>(42)</sup>

以上のことからウーミデイを共和制主義者や反メデイチの動きと結び付けようとする説は、受入難いことが分かるだろう。<sup>(43)</sup> むしろウーミデイのメンバーはコジモ体制に順応し、そこから庇護を得ようとしていたのである。アレッサンドロ時代に共和制主義者の疑いをかけられて

いたラスカが、アレッサンドロに反感を持っていた可能性は否定できないが、それは決してメディチ家全般、君主制一般に対する反感ではなかったと思われる。彼にとって政権の交替は、新しいチャンスとして歓迎すべきことだった。従って、一五四〇年十一月にラスカがウーシデイをつくったとき、それは君主に対立するものではなく、結果的には徒勞に終わったのであるが、君主に認められ、その庇護を受けることを目指すものだったのであり、たとえこれから述べるように改名、改革に抵抗を示したとしても、それは共和制主義者の抵抗と解釈されるべきではないであろう。

- (1) Cf. C. Di Filippo Bareggi, "Cultura e società fra Cinque e Seicento: Le Accademie", in *Società e Storia*, vol. 6, n. 21, 1983, 641-665.
- (2) Cf. A. Della Torre, *Storia dell'Accademia platonica di Firenze*, Firenze, 1902; L. Ferri, "L'Accademia platonica di Firenze e le sue vicende", in *Nuova antologia*, vol. 34, 1891, 226-244; A. Field, *The Origins of the Platonic Academy of Florence*, Princeton, 1988; *Marsilio Ficino e il ritorno di Platone*, a cura di G. C. Gargagnini, Firenze, 1986.
- (3) Cf. A. L. De Gaetano, *Giambattista Gelli and the*

*Florentine Academy: the Rebellion against Latin*, Firenze, 1976, pp. 87-95; F. Gilbert, "Bernardo Rucellai and the Orti Orzellari", in *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, vol. 12, 1949, 101-131; G. Lucarelli, *Gli Orti Orzellari*, Lucca, 1979; P. O. Kristeller, "Francesco da Diacceto and Florentine Platonism in the Sixteenth Century", in *Studies in Renaissance Thought and Letters*, Roma, 1984 (1 ed. 1956), pp. 287-336; L. Passerini, *Degli Orti Orzellari*, Firenze, 1875.

- (4) Cf. De Gaetano, *op. cit.*, pp. 95-100; A. Lesen, "Leone X e l'Accademia Sacra Fiorentina. La reazione contro il neopaganismo umanistico", in *Convivium*, vol. 3, 1931, 232-246; G. Piccioli, "Le ossa di Dante e la sacra Accademia Medicea", in *Annali dell'Istituto di studi danteschi*, vol. 1, 1967, 453-465.
- (5) Cf. F. Iacometti, *L'Accademia senese degli Intronati*, Siena, 1950.
- (6) BMF, B III 52, c. 1r.
- (7) L. Mendelsohn, *Paragoni. Benedetto Varchi's Due Lezioni and Cinquecento Art Theory*, Ann Arbor, 1982, pp. 19-20.
- (8) アンナ・マリア・ブニッチ・インフアンティ・ドゥ・ラ・フィロソフィア・クリティカ・エ・ストルтура・ナラチウ・ナ・ナポリ, F. Bruni, *Sistemi critici e strutture narrative*, Napoli, 1969, pp. 11-42; id., "Sperone Speroni e l'Accademia degli Infiammati", in *Filologia e letteratura*, vol. 12, 1967, 24-71; F. V. Cerreta, "An Account of the Early Life of the

- Accademia degli Infiammati in the Letters of Alessandro Piccolomini to Benedetto Varchi", in *Romantic Review*, vol. 48, 1957, 249-264; R. S. Samuels, "Benedetto Varchi, the Accademia degli Infiammati, and the Origins of the Italian Academic Movement", in *Renaissance Quarterly*, vol. 29, 1976, 599-634 を参照。
- (9) Cf. *Ibid.*, Cerreta, op. cit., p. 251.
- (10) *Opere di Antonfrancesco Grazzini* detto il Lasca, UTET, 1974; O. Dini, *Il Lasca fra gli Accademici*, Pisa, 1896; R. J. Rodini, *Antonfrancesco Grazzini. Poet, Dramatist, and Novelist*, The University of Wisconsin Press, 1970; C. Spalanca, *A. F. Grazzini e la cultura del suo tempo*, Palermo, 1981 を参照。
- (11) Rodini, *op. cit.*, p. 39.
- (12) A. Biscioni, Vita del Lasca, in A. F. Grazzini detto il Lasca, *Le cene ed altre prose*, a cura di P. Fanfani, Firenze, 1888, p. XII, Rodini, *op. cit.*, pp. 4-5.
- (13) Antonfrancesco Grazzini detto il Lasca, "Lettera a messer Bernardo Guasconi in Roma", in *Giornale storico degli archivi toscani*, vol. 3, 1852, p. 290. また Spalanca, op. cit., p. 70 を参照。
- (14) 彼については以下の文献を参照。Isidor Del Lungo, *Dino Compagni e la sua cronica*, Firenze, 1880, pp. 729-749.
- (15) 彼がロジモの宮廷によく出入りしていたことが、ラスカのリネンティから明らかである(A. F. Grazzini, *Rime burlesche edite ed inedite*, a cura di C. Verzone, Firenze, 1882, p. 7)。
- (16) リニコロ・トナシンドゥッチが Niccolo Martelli, *Il Primo libro delle lettere*, Lanciano, 1916, pp. 5-10; Martelli, *op. cit.*, pp. 20-21; Plaisance, "Une première affirmation", p. 383, n. 87, 399-401.
- (17) *Il mondo nuovo* di Bartolomeo Baccelli, Bartolomeo Benci, Simone della Volta, Piero Fabbrini, Gismondo Martelli, Cinzio Romano, Filippo Salvetti, Michele Vivaldi ら。
- (18) "...fussino la maggior parte d'essi in exercitij mercantili occupato..." (BNF, II.V.1, c. 6v).
- (19) フォルネンティーナの記録では、ウーミンティはイタリア語の問題に関心を持っていたとされているが(BMF, B III 52, c. 1r)、『フレンサンスも指摘しているように、実際には彼の関心は詩に限られていた(Plaisance, "Une première affirmation", pp. 387-388)。
- (20) 規約には「この私達のアカデミア・デッリ・ウーミンティは、気晴らしのためにつくられたのだから、私達はアカデミアが完全に自由であることを望み、意図するものであり、会員の不自由や束縛を望まない。このような条件で設立されたのは、アカデミアが長続きするためであり、煩わしい規制はこのような正直な気晴らしから逸脱させる原因となるからである」とある(BNF, II-IV-1, c. 4r)。

- (12) Iacometti, *op. cit.*, p. 4.
- (22) Cerreta, *op. cit.*, p. 250.
- (23) Cf. Maylender, *op. cit.*, vol. 1, pp. 128-129; C. Vasoli, "Le accademie fra Cinquecento e Seicento e il loro ruolo nella storia della tradizione enciclopedica", in AA. VV., *Università, Accademia e Società scientifiche in Italia e in Germania dal Cinquecento al Settecento*, Bologna, 1980, pp. 85-88; ハンズ・トーマス・マウリス・M. Lowry, *The World of Aldus Manutius*, Oxford, 1979, pp. 188-216 参照。
- (24) Vasoli, "Le accademie fra Cinquecento e Seicento", pp. 81-115.
- (25) Di Bareggi, "In nota alla politica culturale di Cosimo I" p. 527.
- (26) Plaisance, "Une première affirmation", p. 405.
- (27) *Ibid.*, p. 433.
- (28) J. R. Hale, "The End of Florentine Liberty: The Fortezza da Basso", in *Florentine Studies*, London, 1968, pp. 509-510; Albertini, *op. cit.*, p. 195.
- (29) *Ibid.*, p. 236.
- (30) *Ibid.*, p. 239.
- (31) *Ibid.*, p. 255. Cf. F. Vettori, *Scritti storici e politici*, a cura di E. Niccolini, Bari, 1972, pp. 84-85.
- (32) コシモ1世の時代の歴史家たちの研究報告 (Di Bareggi, Albertini, *op. cit.*, pp. 306-350.
- (33) ASF, Otto di guardia e balia, deliberazione e partiti,

filza 13, cc. 45v-46v. Cf. Plaisance, "La structure de la beffa", p. 90.

- (34) Plaisance, "La structure de la beffa", p. 90, n. 132.
- (35) *Ibid.*, pp. 90-91.
- (36) ハンの書籍のコンプトインゴ出版された (Giornale storico degli Archivi toscani, vol. 3, 1859, pp. 288-294. Cf. Spalanca, *op. cit.*, pp. 69-74)°
- (37) L. Cantini, *Legislazione toscana*, Firenze, vol. 1, 1800, p. 127.
- (38) 例えばアンthonサンドロ政権に協力したフランチェスコ・マヒンテリは、亡命後のフィレンツェ・ストロニンへの書籍の取りかかった (Cf. G. B. Niccolini, *Filippo Strozzi*, Firenze, 1847, p. 206)°
- (39) BNF, II-IV-1, cc. 18r, 60v, 76v, 77r, 91v, 92r, 92r-97v.
- (40) *Ibid.*, c. 61r.
- (41) ハンの書籍のコンプトインゴ Grazzini, *Rime burlesche*, pp. 342-346, 447-448; Plaisance, "Culture et politique", Rodini, *op. cit.*, pp. 10-14 参照。
- (42) BNF, II-IV-1, cc. 17r-18v.
- (43) ハンズ・マヌーリは、マニングトを反ロミンゴの動きを促した者であると見なして石版印刷 (Di Bareggi, "In nota alla politica culturale di Cosimo I", pp. 529-530; Vasoli, "Cultura e mitologia", pp. 168-169)°

## 二 ウーミデイからフィオレンティーナへ

ウーミデイからフィオレンティーナへの変化は、新会員の入会から始まる。しかし彼らの入会は、ウーミデイのメンバー自身が望んだことであつた。彼らはアカデミアの目的を「気晴らし」として、既成の学問や知識人と一線を画す一方で、権威ある学問や文学に、そしてまた名声にもあこがれていた。コジモに庇護を求めたのもその現れの一つである。このアンビバレンツな態度は、ラスカに特に顕著に見られ、プレッサンスを初めとして、研究者の認めるところである。<sup>(1)</sup>より高度な教育を受けた知識人の入会は、ラスカからのこの「野心」、上昇志向の現れであつた。

ウーミデイの設立から間もない十一月半ばから下旬のある日、最初の新入会員四人が承認された。<sup>(2)</sup>新会員は皆、ウーミデイのメンバーより高い教育を受けた知識人で、社会的地位も彼らより高い者達であつた。すなわち、ルーカ・マルティーニ、ジョヴァンニ・ノルキアーティ、ゴロ・デッラ・ピエーヴェ、ジョヴァンバッティスタ・デル・ミラネーゼの四人である。彼らは、パドヴァのアカデミア・デッリ・インフィアンマーティの影響を

強く受けていたと思われる。というのは、この四人のうち最初の二人、マルティーニとノルキアーティは、インフィアンマーティの中で最も活動的なメンバーの一人であつたベネデット・ヴァルキの友人で、彼と直接手紙のやり取りをしており、特にマルティーニはヴァルキの親友であり、彼を「聖人」のようだと形容するほど尊敬していたからである。<sup>(3)</sup>またインフィアンマーティはイタリア語の擁護、イタリア語への翻訳による知識の普及といったプログラムで知られているのであるが、ノルキアーティはトスカナ語の整備に非常に強い関心を持ち、トスカナ語の辞書の構想を抱いていたことが知られている。<sup>(4)</sup>プレッサンスは、インフィアンマーティがウーミデイのメンバー、特にラスカに与えた影響を重視しているが、これは受け入れ難い。確かにラスカは、インフィアンマーティで活躍していたベネデット・ヴァルキを「ペトラルカに継ぐ第二の師」と呼ぶほど尊敬している<sup>(5)</sup>ので、彼がヴァルキの活躍していたインフィアンマーティに触発されて、ウーミデイを設立した可能性は高い。しかしラスカはインフィアンマーティのメンバーと直接接触する術は持っていなかったし、またウーミデイの活動は非常に限られており、インフィアンマーティを特徴

付けるイタリヤ語の擁護、イタリヤ語への翻訳による知識の普及といったプログラムを欠いている。ウーミディへのインフィアンマーティの影響は表面的なものにとどまったと考えるべきであろう。実際ウーミディのメンバーは、アカデミアが変革されてもなお、創立時のメンバーだけでフィオレンティーナとは別個の活動を続けるのであるが、彼らの活動は最後まで詩の執筆に限られているのである。インフィアンマーティのプログラムを継承したのは、むしろウーミディに新しく入会した者たちであったと考える方が自然である。直接インフィアンマーティのメンバーと接していた彼らこそ、フィレンツェのアカデミアにインフィアンマーティをモデルにした変革をもたらさしめる人物であった。

実際新会員のイニシアティヴによって、アカデミアは変わっていくのである。フィオレンティーナの記録には、新会員を記した直後に次のように書かれている。

これらの「新会員の意見では、ペトラルカを読み、いくつかのソネットをつくること」「が会の目標」であったが、「そのためには」リーダーや秩序が必要だと感じられるようになったので、彼らは一人の会

アカデミア・フィオレンティーナの誕生

長を持つことにした。新たな規定がなされ、講義について細かく決められるまで、「新会員の一人」ゴロ・デツラ・ピエーヴェ氏が「その職に」選ばれた。彼はできる限り、この若者達のよき意図を助け、祝日に何回かストラディーノの家で、講義を行なった（「」内筆者）。

この時点で、すなわちウーミディの設立から一ヶ月もたない内に、既にウーミディの創始者メンバーの実権が奪われていることに気づく。それまでの二人からなる会長 (consoli) に加えて、新たに「会長」職 (retiore) が置かれ、その職に新会員のデツラ・ピエーヴェが就き、若い会員の指導にあたることになった。創立メンバー以外の者に大きな影響力が与えられたのである。しかも規約の改正も予定されている。アカデミアの変換への第一歩がこの時踏み出されたのである。

一五四〇年十二月二十五日には、ノルキアーティの家で会合が開かれ、更に二人の新会員が入会した。コジモ・バルトリとピエルフランチェスコ・ジャンブツラーリである。バルトリは親メデイチ派の家柄の出身で、彼自身も一五六〇年から六十二年までは、若い枢機卿ジョ

バンニ・デ・メデイチに任せ、一五六二年から七十二年まではヴェネツィア駐在のエージェントとしてメデイチ家に仕えた。彼は多才な人間で、レオンバッティスタ・アルベルティの翻訳、ボエティウスの翻訳、測量学、歴史などの著作を残し、フィチーノの著作の編集出版を行ない、また友人ヴァザーリに、パラッツォ・ヴェツキオの絵画のために多くの助言を与え、『列伝』出版のためにも尽力したことが知られている。<sup>(10)</sup>バルトリの友人であるジャンブッラーリも親メデイチ派の家の出で、宇宙論から歴史、言語論まで幅広い関心を持ち、いくつかの著作を残している。<sup>(11)</sup>当時彼は聖ロレンツォ教会の聖堂参事会員だったので、同じ教会の聖堂参事会員であったノルキアーティの推薦で、アカデミアに入会したと考えられる。また後に彼ら二人は、G・B・ジェツリと共に、トスカナ語の起源はラテン語以前のアラム語にあるという主張によって、コジモの政治的プロパガンダに貢献することになる。<sup>(12)</sup>二人とも、イタリア語の整備の問題に関心を持っていたことが知られており、パドヴァのインフィアンマーティの動向には注目していたと思われる。

彼らの入会以後、この二人と二人の友人であったノルキアーティが更にアカデミアの変革を進めることになる。

彼らの入会を決定する会合が、ノルキアーティの家で開かれたというのは、興味深い事実である。これまで会合はストラデーイーノの家で開かれていた。このことからウーミデイの創設者たちの権威が失われつつあるのが分かるであろう。実際彼らの入会後まもなく、再びノルキアーティの家で会合が開かれるのであるが、そこで終に規約の改変とそのため委員が決められるのである。しかも二人の委員は、入会したばかりのバルトリとノルキアーティで、彼らは毎日曜と毎木曜に講義を行なうことを決定した。<sup>(13)</sup>講義の日がインフィアンマーティの日取りと同じことに注目したい。しかも次のバルトリの家で行なわれた会合では、アカデミアの活動についても変更がなされた。彼らは「全ての学問を私達の言語で読めるようになる機会が生まれることを考えて」、「このアカデミアではあらゆるラテン作家について講義できるが、トスカナ語で講義しなければならず、また講義するものは、翻訳したテキストを提出しなければならぬ」と決定したのである。<sup>(14)</sup>これこそインフィアンマーティのプログラムであり、ラテン語を苦手とするウーミデイには欠けていたものである。またこの時十二人の新会員が承認されたが、彼らの中には、フィレンツェ軍総指揮官、四人の

司教、コジモの秘書が含まれており、<sup>(15)</sup>彼らの入会は、インフィアンマーティにおける「長老 (padre)」制度を思わせるものである。インフィアンマーティにおける彼らの役割は、アカデミアに「更なる格式を与える」ものであったが、ウーミデイにおいてもそれは同様であった。<sup>(17)</sup>

一五四一年一月二十日の会合では、更に十四人の新入会員が認められた。<sup>(18)</sup>この時も新会員はフィレンツェの有名知識人に加えて、コジモに仕える貴族や聖職者が含まれており、後者は明らかに「更なる格式を与える」ための入会であった。この時点でメンバーは総員四十四名となった。地位も名誉もある新会員の増加は、創設者達の権威をますます低下させたと思われる。

一月三十一日、再びバルトリの家で開かれた会合では、<sup>(19)</sup>終に全面的に規約を改正することが決まり、委員が四人選ばれた。四人の内一人はバルトリ、他の三人は一月二十一日に入会したばかりの者で、その内二人はコジモに仕える貴族であった。<sup>(19)</sup>規約改正委員四人は何回か集まった後、更にルーカ・マルティーニ他二人の新会員を加えて協議を重ね、一五四一年二月十一日、終に新規約を完成させ、アカデミアで投票にかけた。<sup>(20)</sup>これまでウーミデイの創立メンバーは、彼らのアカデミアの変革を黙っ

てみていた。しかしこの会合で彼らは始めて改革に抵抗を示す。ウーミデイの記録を見てみよう。

規約を決め、準備する役目選ばれた四人は、私達ウーミデイに従っているとは考えず、アカデミアはウーミデイの名前をやめ、ただフィオレンティーナと呼ばれ、正式に一五四一年三月二十五日に発足すると秘かに決定した。そして新たに多くの偉大な文学者達の入会の後、私達の規約を廃し、会長や他の役職を廃して、三月二十五日までの「会長」代理と四人の補佐役を設置した。全ての会員の前で規約を読み上げて、「投票に」勝つために、「コジモ一世」閣下がこのように望んだのだと主張した。ラスカは書記としてこのことを記すよう求められたが、規約を作成するためには呼ばれなかったもので、公式にこの役職を拒絶した。∴「結局」そこに居合せていたピッコ・コロンナ閣下と「コジモ」閣下にこの争いは任され、各々が満足した。<sup>(21)</sup>「内、傍点筆者」。

一方フィオレンティーナの記録には以下のようになつて

いる。

規約は承認されたが、白票「Ⅱ反対票」一票を除けば満場一致であった。何人かがアカデミアの改名に憤慨したので、彼らを満足させるために、アカデミアの名前に関する条項は承認されず、先送りされ、「コジモ」閣下に委ねることとなった。ピッコ閣下が全員に頼まれて、「コジモ」閣下の御意向を探り、その後アカデミアで報告することとなった<sup>(22)</sup>。「Ⅰ」内筆者)。

こうしてアカデミア・デッリ・ウーミデイは創立わずか数カ月で消え去り、アカデミア・フィオレンティーナに改名された。記録ではコジモの決定を待つことになっているが、結局予定通りアカデミアはフィオレンティーナと改名される。

二つの記録をまとめてみよう。規約改正委員は、ウーミデイの創立者達には何も知らせずに改正を進めた。会合が常にバルトリの家で行なわれていたのは、彼らに知らせないためだったのかもしれない。新規約が発表され、しかも改名も伴っていることを知った創立者達は抗議し

た。その中心にいたのはラスカだったと思われる。彼は書記の仕事を拒否し、新規約、特に改名に反対の態度を貫いた。おそらく反対票を投じたのもラスカであろう。また反対票を投じたのがラスカ一人だったという事実、コジモの名前が出されたことで説明できる。しかしラスカの抵抗は、明らかに新会員達の独断的行動に対して行なわれたもので、それをプレッサンスが言うように、「伝統的なフィレンツェの政治制度を見習った、アカデミアの民主主義的な運営」の主張とするのは、誤りであろう。前述したように、ラスカが共和制の信奉者であったとは考えられないからである。最終的にアカデミア・フィオレンティーナは、一五四一年三月二十五日に正式に発足する。

その後フィオレンティーナは文化面で国を代表する国家機関へと発展する。ウーミデイの設立メンバーは徐々に姿を消し、一五四七年の会員整理の際、会員の義務となっていた講演や作品の提出を拒否し続けていたラスカは退会させられ、残ったのは三人だけで、その三人も目だった活動はしていない。一方コジモの庇護を受けてアカデミアは繁栄する。アカデミアの役員は国家から給料を支給されるようになり、後には講師にも支給されるよ

うになる。しかしその後のフィオレンティーナの改革と発展は、本論の範囲を越えるものである。ここでは、ウーミデイからフィオレンティーナへの変化に戻って、ウーミデイは共和制支持で、反コジモ、反君主制のグループであったとするプレッサンスの説を考察することにする。

- (1) Marconcini, *op. cit.*, p. 23; Pedrotti, *op. cit.*, p. 25; Plaisance, "Une première affirmation", p. 369; G. Bertone, "Comico farsesco e comico avventuroso nel teatro del Lasca", in *Studi di filologia e letteratura*, vol. 2-3, 1975, 235-257. またロブリーニは、ラスカの知識人に対する劣等感の示唆については (Rodini, *op. cit.*, p. 36)。
- (2) BMF, B III 52, 1r.
- (3) ASF, Carte strozziane, filza 137, c. 161r. プルティーニは多くの芸術家、知識人と親しく、「ロッキエー世の私的な文化アドバイザー」であり (Cochrane, *op. cit.*, p. 70)。後にはガレー船の監督官としてコンチヤビヤに彼に就くべきとを参照。L. Cantini, *Vita di Cosimo de' Medici, primo granduca di Toscana*, Firenze, 1805, p. 193, n.1, pp. 192-193; Samuels, *op. cit.*, p. 625. またヘムルキビロツトは U. Pirotti, *Benedetto Varchi e la cultura del suo tempo*, Firenze, 1971; Samuels, *op. cit.*, を参照。
- (4) ノルキアーティに就くは G. Negri, *Istoria dei*

アカデミア・フィオレンティーナの誕生

- fiorentini scrittori*, Ferrara, 1722 (ristampa, Bologna, 1973), p. 291; *Prose fiorentine*, raccolte dallo Smarrito (C. Dati), Venezia, 1751, parte I, vol. I, pp. 49-52 を参照。
- (5) Plaisance, "Une première affirmation", pp. 381-382.
  - (6) *Prose fiorentine*, parte IV, vol. I, p. 33.
  - (7) BMF, B III 52, c. 1r.
  - (8) チンラン・ユエーヤヒビロツトはよむかこつたさう。Cf. Negri, *op. cit.*, p. 315.
  - (9) BMF, B III 52, cc. 1r-1v.
  - (10) ハナトリビロツトは、松本典明「十六世紀フョレンツァのバネロンのパトロン・画家・構図助言者」『日伊文化研究』三十一号 (一九九四年) 二一六-二二五頁。G. Mancini, "Cosimo Bartoli (1503-1572)", in *Archivio storico italiano*, vol. 76, 1918, 84-135; J. Bryce, *Cosimo Bartoli (1503-1572). The Career of a Florentine Polymath*, Geneva, 1983 を参照。
  - (11) シャンブマントリビロツトは C. Bartoli, "Oratione recitata pubblicamente nella Accademia Fiorentina, nelle esequie di Messer Pierfrancesco Giambullari", in P. F. Giambullari, *Historia dell'Europa*, Venezia, 1566, pp. 161-167; P. Fiorelli, "Pierfrancesco Giambullari e la riforma dell'alfabeto", in *Studi di filologia italiana*, vol. 14, 1956, 177-210; P. F. Giambullari, *Regole della lingua fiorentina*, a cura di I. Bonomi, Firenze, 1986, pp. XI-XVIII; Negri, *op. cit.*, pp. 453-454 を参照。
  - (12) G. B. Gelli, "Dell'origine di Firenze", a cura di A.

D'Alessandro, in *Atti e memorie dell'Accademia toscana di scienze e lettere La Colombaria*, vol. 44, 1979, 59-122; P. F. Giambullari, *Il Gello*, Firenze, 1546; G. Cipriani, *Il mito etrusco nel rinascimento fiorentino*, Firenze, 1980; Vasoli, "Cultura e mitologia", pp. 171-176.

- (13) BMF, B III 52, c. 1v.
- (14) *Ibid.*
- (15) *Ibid.*
- (16) Samuels, *op. cit.*, p. 612.
- (17) 実際フィオレンティーナでも、一五四六年長老 (padre) 制度がつくられる (Capitoli dell'Accademia Fiorentina, BNF, classe IX, 91, cc. 5v-6v)。長老に選ばれた者達がアカデミアでほとんど活動していないのは記録から明らかである。
- (18) BMF, B III 52, c. 2r.
- (19) *Ibid.*, c. 2r. バルトリ以外の委員は、Alessandro dei Caccia, Bartolomeo Panciatichi, Lorenzo Benivieni である。
- (20) BMF, B III 52, c. 2r. また新しい規約は残念ながら失われてしまったが、その内容をうかがわせる書簡が残っている (BNF, II-III-427, c. 1r-1v)。
- (21) BNF, II-IV-1, c. 5r.
- (22) BMF, B III 52, c. 2v.
- (23) Plaisance, "Une première affirmation", p. 409.

### 三 コジモ一世

多くの研究者は、ウーミデイは絶対君主によって知識人をコントロールするために、フィオレンティーナへ変えられたのだと考えており、<sup>(1)</sup> プレッサンスも、コジモはアカデミアを、知識人をコントロールし、政治から関心を逸らすための道具と考えていたと主張している。<sup>(2)</sup> 大局的に見た場合、これは全く間違っているとは言えない。

コジモはフィオレンティーナを自らの文化政策に積極的に利用しているし、また一五四五年以降は強力にアカデミアに介入している。しかしコジモはウーミデイからフィオレンティーナへの変化そのものには、どれほど関わっていたのだろうか。

端的に言えば、この時期のコジモが、ウーミデイの変革に積極的に関わっていたとは思えない。というのはアカデミア設立当時、コジモ政権が文化政策に力を入れられるほど安定していなかったからである。コジモは最初からアレッサンドロの後継者であったわけではない。アレッサンドロが暗殺された後、グイッチャルディーニを初めとする貴族が、いわば自分達の傀儡とするために、傍系であった彼に君主の地位を与えたのである。当時コ

ジモはまだ十八才であった。この時フィレンツェは、国内外共に多くの問題を抱えていた。ウーミデイが設立された一五四〇年十一月、すなわちコジモが即位してからほぼ四年後には、確かに状況は変わっていた。コジモを傀儡にしようとしていた貴族は、徐々に排除され、フィレンツェに攻めてきた亡命者軍は粉碎され、深刻な脅威ではなくなった。カール五世もコジモを正式にアレッサンドロの後継者とし、またナポリ副王の娘、エレオノーラ・デイ・トレドがコジモの妻になることを認めた。しかしまだまだ多くの問題が残されていた。国力は未だ回復せず、また一五三九から一五四〇年には飢饉に苦しめられた。教皇パウロ三世との不和は続き、スペイン軍に押えられているフィレンツェとリヴォルノの要塞も未だ回復されていなかった。特にこの要塞の回復は、フィレンツェの国としての独立を意味し、コジモが解決に努めてきた問題であったが、二つの要塞が返還されるには、一五四三年春まで待たなければならなかった。

一五四〇代初めまでのコジモ政治は、受身の政治であり、既に存在している問題を解決していくだけであった。ディアツによれば、要塞が回復される一五四三年までのコジモの政策は暫定的なもので、本格的な政策はそれ以

後始まるという<sup>(4)</sup>。実際コジモは、一五四三年になるまで行政機構には一切手を触れていない。新しい制度がつくられ、絶対主義的中央集権体制が整えられるのは、それ以後のことである。コジモがこのように国内問題へも目を向けられるようになったのは、カール五世とフランソワ一世の間の戦争が一五四二年六月に再燃し、それがイタリア中部までは波及してこなかったためであるが、更に大規模な政策が始められるのは一五四四年、クレピエの和約によつてカール五世とフランソワ一世のイタリアにおける覇権争いが終結してからのことであつた<sup>(5)</sup>。

文化政策についても同じことが言える。一五四〇年代初めまで、コジモの結婚の際の祝祭と一五四〇年に君主の住居となつたパラッツォ・ヴェッキオの装飾を除けば、大きな文化事業は行なわれていない。芸術の分野においてもコジモの統治の初期は、「矛盾と場当たり主義」に特徴づけられていた<sup>(6)</sup>。実際多くの知識人や芸術家がフィレンツェを離れていた。コジモの招聘によつて、あるいは祖国が安定したのを見て亡命者達が帰国してくるようになるのは、一五四二年以後である<sup>(7)</sup>。閉鎖されていたピサ大学がやつと復興されたされたのも、一五四三年のことであつた。しかも、フィオレンティーナが知識人のコ

ントロールというはつきりした目的のためにつくられたのだとしたら、ピサ大学へも当然国家によるコントロールがなされたと考えるのが自然であろう。ところがこの時つくられた大学の規約は、大学は自治を保ち、国家からのコントロールはなされないと定めている。プラテツリによれば、大学の自治が奪われるのは一五七三年以後、つまりコジモの治世が終つてからのことであつた。<sup>(8)</sup> コジモにはまだ知識人をコントロールするような段階にはなかつたのである。共和国の伝統は消え去つたわけではなく、強力なコントロールは反発を招く恐れがあつたし、また何よりその前に知識人を呼び戻し、フィレンツェに文化的繁栄を取り戻さなければならなかつた。

このような背景を踏まえると、彼のウーミデイに対する態度もよりわかりやすいものとなる。コジモはウーミデイにもフィオレンティーナにも強く干渉しようとはしていない。実際ウーミデイからフィオレンティーナへの変化の際、コジモの名が出てきたのは一度だけで、それも決してコジモの意志は前面に押しだされてはいない。コジモはただ改革に賛同を示しただけである。従つて、改革の推進派がコジモの名を利用しただけである可能性も、ないわけではない。プレツサンスは、積極的に改革

を行なつたバルトリやジャンブツラーリはコジモの手先であり、コジモの秘書、ピエルフランチェスコ・リツチヨの立てたアカデミア変革計画を執行するためにアカデミアに入会したと主張しているが、<sup>(9)</sup> しかしこれは、バルトリのモノグラフィイを書いたブライスが言っているように、「陰謀的要素の誇張」であらう。<sup>(10)</sup> もちろん、リツチヨが書いているアカデミアについての報告書から分かるように、コジモは、フィオレンティーナが設立されて以来、アカデミアで行なわれていることを知らされていたし、<sup>(11)</sup> コジモに仕える秘書や官僚達がアカデミアに入会していたのも事実である。それはかつてオルティ・オリチェツラーリがそうなつたように、フィオレンティーナが共和国主義者の陰謀の場となるのを恐れたからかもしれないが、むしろフィレンツェに文化の繁栄を取り戻す一つの手段として、アカデミアを順調に運営させるためだつたと考える方が自然だろう。実際コジモは、アカデミアの活動が低調になる一五四六年までフィオレンティーナに積極的に介入しようとはしていない。それ以前にコジモがアカデミアに干渉したのは、フィオレンティーナの設立後一度だけ、一五四二年二月二十二日に、アカデミアの会長にフィレンツェ大学の学長の地位を与

えることを決定した法を出した時だけである。その法には以下のようにある。

：寛大なるコジモ「イル・ヴェツキオ」とそれ以後のいと高貴なるメデイチ家の恩恵と助けが、失われた優れた作品、特にギリシャ語やラテン語の文学に光をあて、高貴なる祖国ばかりではなく、全世界とこれらのすばらしい言語の記憶に役に立ったことを考慮し、また最上の君主として、忠実なる市民が：今日では世界の大部分で非常に高く評価され、またその美しさ、高貴さ、優雅さのため強く望まれて、いる私達の言葉を誇りとすることを望んで、現在、そしてこれから先アカデミア・フィオレンティーナの優秀で高貴な精神が、主君の栄光のため、祖国の名誉のため、そして彼ら自身を高めるために、閣下によるあらゆる高潔で価値ある好意に助けられながら、より熱意をもってその優れた活動、すなわち解釈し、作品をつくり、あらゆる学問を他の全ての言語から我々の言語に訳すという活動を続けることができるように、以下のことを決定した。フィレンツェ大学の学長に属する全ての権威、名誉、特権、

アカデミア・フィオレンティーナの誕生

地位、報酬、賞与は、今現在から、前述のアカデミア・フィオレンティーナの会長に属することとする。：アカデミア・フィオレンティーナは我々の非常に優美な言語の母として、このような地位を保ち、それが万人に公表されるのであるから、アカデミアが学者達が期待し、外国人が賞賛し、いと高貴なる我らの君主の寛大さに値するような成果をあげないとするれば、それは恥ずべきことであるばかりでなく、非難されるべきである。我らの君主は、アカデミアの創立だけではなく、またそれを受け入れ、寵愛を与えるだけでも満足せず、褒賞によって、アカデミアが活動するよう奨励し、報酬によって促進し、度量の広さと寵愛によって活発にしたのである：<sup>(12)</sup>

(「」内筆者)。

この「アカデミア・フィオレンティーナに与える恩恵についての法」から分かるのは、コジモのアカデミアの活動への干渉ではない。活動自体については既にバルトリらによって定められたトスカナ語への翻訳や作品の執筆といった活動を承認しているだけであり、新しい点はないからである。また同じ理由から、コジモはアカデミア

八三 (四〇七)

をコントロールしたり、新たな方向づけを行なおうとしているのでもないことが分かる。この法に現れているのは別の意図である。それはまさに「褒賞によってアカデミアの活動を奨励」することであり、その目的は法の前半部分にはつきり現れている。すなわちコジモ・イル・ヴェッキオやロレンツォ・イル・マニフィコのような「学芸の保護者」としてのメデイチのイメージをコジモに与えることである。古典語からトスカナ語へと対象は変わっているが、アカデミア・フィオレンティーナへの庇護は、明らかにコジモとロレンツォがアカデミア・プラトニカに与えた庇護の模倣であろう。コジモはこの類似がもたらす、彼自身のイメージ・アップを狙ったものと考えられる。この点に関して、フィオレンティーナの初代会長にロレンツォ・ベニヴィエーニが選ばれたのは、非常に暗示的である。彼は、フィチーノやピコ・デッラ・ミランドラの友人で、コジモ・イル・ヴェッキオとロレンツォ・イル・マニフィコのもとで栄えたアカデミア・プラトニカのメンバーであり、後には熱烈なサヴォナローラの信奉者となったジロラモ・ベニヴィエーニの甥である<sup>(13)</sup>。この大叔父の感化を強く受けていた彼は、メデイチ家とは相容れない立場をとっており、彼自身亡命

こそしなかったものの、メデイチ家支配のもとで公職にはつかず、また亡命者と書簡のやり取りがあったことが分かっている。彼は一五四一年一月二十日アカデミアに入会し、規約作成メンバーにもなり、初代会長にまで選ばれるのであるが、彼は一度もアカデミアで講義を行なっていないし、また初代会長を辞めた後は、一度も役に就いていないのである。彼が選ばれたのは明らかに、彼の一族が持つ過去の文化的繁栄との繋がりのため、フィチーノやピコの時代のアカデミア・プラトニカとの繋がりのためであろう。ベニヴィエーニの存在は、過去にフィレンツェにあった高名なアカデミアとのつながりを強調することを可能にし、それによって更にフィレンツェにおける文化の伝統、コジモ、ロレンツォの下で栄えた文化の黄金時代の復活を誇示することを可能にしたのである<sup>(14)</sup>。一七一七年にアカデミアの歴史を出版したサルヴィーニが既に言っているように、ベニヴィエーニはアカデミアに「彼の名前と名字によって祝福を与えた」といえるだろう<sup>(15)</sup>。

即位して四年弱のコジモにとって、まずアレックスサンドロの後継者としての正当性を強調し、自らの「君主」としてのイメージを与えることが急務だった。ウーミデイ

が設立されたのと同じ一五四〇年に、現在のヴィア・カヴールにあるメディチ宮から共和国時代の政治の中核であったパラッツォ・ヴェッキオにコジモが居を移したのも、まさにそのためである。彼は象徴的行動によって、君主としてのイメージを確立しようとしていた。この点を考えに入れると、コジモがアカデミア・フィオレンティーナへ庇護を与えることによって狙っていたものが見えてくる。文化の繁栄をもたらす「学芸の保護者」としてのイメージは、「良い君主」のイメージを作り出す重要な要素の一つであり、そして「良い君主」のイメージは、新しい君主国家を安定させる上で重要な役割を果たす。また国外に逃亡している多くの知識人や外国人の優秀な人材を集めるためにも、まずコジモ自身のイメージアップ——すなわち知識人や芸術家が頼れる安定している、学芸を保護するだけの力を持っている君主としてのイメージ——が必要であった。コジモにとって、アカデミア・フィオレンティーナへの庇護は、その格好の機会を提供するものだったのであり、それは民衆的色彩を色濃く持ち、教養レベルも高くないウーミディでは与えられないものであった。ウーミディのメンバーのアピールをコジモが黙殺した理由も、おそらくここにあるのだ

アカデミア・フィオレンティーナの誕生

ろう。コジモにとってウーミディは利用価値を持っていなかったのである。

- (1) Cf. Albertini, *op. cit.*, p. 290; Maylender, *op. cit.*, vol. 3, p. 1; Vasoli, "Cultura e mitologia", pp. 169-170.
- (2) Plaisance, "Une première affirmation", p. 421.
- (3) フィレンツェに残った貴族の代表的人物であるグイッチャルディーニが徐々に勢力を失い、丁重にはあるが政治の中心から遠ざけられ、一五四〇年、失意のうちに死んだのは、その象徴的出来事である (Cf. R. Ridolfi, "Francesco Guicciardini e Cosimo I", in *Archivio storico italiano*, vol. 122, 567-606)。
- (4) Diaz, *op. cit.*, p. 83.
- (5) *Ibid.*
- (6) J. Cox-Rearick, *Bronzino's Chapel of Eleonora in the Palazzo Vecchio*, University of California Press, 1993, p. 252.
- (7) この年、フィリッポ・ストロツィの息子達の家庭教師をしていた文学者ヴェネデット・ヴァルキが、コジモの招聘を受けてフィレンツェに戻ってきており、これがパトロンとしてのコジモの評判を高めることになった。また優秀な教授を大学に揃えるため、イタリア各地にコジモの代理人が交渉に出かけるようになったのも、この年からであった。(Cf. Cochrane, *op. cit.*, p. 70.)
- (8) Pratielli, *op. cit.*, p. 130. ただし、このような変化をも

たらしめた制度そのものは、既にコジモの時代に定められていた (Cf. Marrara, *op. cit.*, pp. 17-18)。

- (9) Plaisance, "Une première affirmation", p. 405. リンチョに「コジモ」*Ibid.*, p. 399, n. 160 を参照。
- (10) J. Bryce, *op. cit.*, p. 43.
- (11) ASF, Mediceo, fil. 355, c. 386v. Cf. Plaisance, "Une première affirmation", p. 425.
- (12) Cantini, *Legislazione toscana*, pp. 195-196.
- (13) 「ニヴェーハーニに「コジモ」」 *Dizionario biografico italiano*, Roma, vol. 8, 1966, pp. 555-556 を参照。
- (14) 一五三九年のコジモとエレオノーラの結婚式の際、既にロレンツォの時代は黄金時代と考えられていた。Cf. Giambullari, *Apparato e feste nelle nozze dell'Illustriss. Sig. Duca di Firenze, e della Duchessa sua consorte*, Firenze, 1539, p. 38; A. C. Minor and B. Mitchell (eds.), *A Renaissance Entertainment. Festivities for the Marriage of Cosimo I, Duke of Florence, in 1539*, Colombia, 1968, p. 141.
- (15) S. Salvini, *op. cit.*, p. 2.

### 結論

これまで私達は、ウーミデイが反君主制、反コジモの団体ではなく、むしろコジモの庇護を求めていたこと、そしてコジモの方もウーミデイを弾圧する意図はなく、むしろ「良い君主」としてのイメージを与えるために、

アカデミアの存在を利用していたということを見てきた。ウーミデイからフィオレンティーナへの変化は、共和制派對君主制という対立に還元してしまうことはできない。しかしだからといって、ウーミデイからフィオレンティーナへの変化が、絶対主義的国家のもとの文化や知識人のありかたの変化を現わしていないということではない。

絶対主義的国家の形成期において、芸術のパトロン達も君主の臣下となる。彼らは「万人に平等な」君主を頂点とするピラミッド構造をつくる。一五四〇年にウーミデイが設立された時、コジモは古い貴族層を排除し、権力を君主に集中させようとしているところであった。そしてそのためにコジモがフィレンツェ貴族を避けて、小都市の貴族階級を重要な官僚として登用したことは良く知られている。<sup>(1)</sup>しかし官僚達もこの時期にはまだ、個人としてパトロンになるほどの富も権力も持っていなかった。従ってまさに絶対主義的体制が創られつつあるこの時期、コジモだけがあらゆる知識人や芸術家に安定した庇護を与えることができた。だからこそ、知識人達はこぞって君主コジモの関心を買ひ、その寵愛を得ようと努力した。ラスカを初めとするウーミデイのメンバーも、

バルトリやノルキア・ティを初めとする知識人達もそれを望んでいたのである。ラスカ達はその競走に敗れたに過ぎない。

もし共和国制度の下であったら、フィオレンティーナに見られるように、知識人達が一つのアカデミアに集中することはなかったであろう。<sup>(2)</sup> コジモへの権力の集中、貴族の官僚化がもたらしたパトロン・クライアント関係の変化、究極的パトロンとなったコジモの存在こそが、それを可能にしたのである。ウーミディからフィオレンティーナへの変化は、絶対主義的国家が創られようとしている過渡期における、君主の宮廷への知識人の統合の過程を示す出来事であった。この過程はこの時やつと始まったばかりで、メデイチの宮廷自体が成熟に至るまでには、コジモの二代後のフェルディナンド一世の時代を待たねばならない。<sup>(3)</sup> このゆっくりとした過程は、君主のイニシアティブのみによって行なわれたものではない。それは、知識人達が政体の変化によって起こった状況に対応するために、新たなパトロンとして君主を選び、名譽を求めて君主の宮廷に集まったことから引き起こされたものである。文学者を統制するアカデミア・フィオレンティーナとやらんで芸術家を統制したといわれるアカデ

ミア・デル・デイゼーニョ（一五六三年発足）も、君主のイニシアティブによってではなく、ヴァザリを初めとする芸術家自身が自発的に創り、君主に捧げたものである。<sup>(4)</sup> 彼らの態度を退廃として、あるいはベンツォーニのように宮廷人の「隷属への欲求」(le libidini della servitù)として片付けてしまうのはたやすいが、<sup>(5)</sup> それでは彼らの生きていた社会、文化を理解することにはならない。このような態度は、彼らにとって自然な、当然の選択であった。確かに彼らの選択は、君主による知識人のコントロールをより容易にし、またアカデミアが君主の政治的プロパガンダの道具となる道を開いた。知識人の宮廷への統合は、知識人自身の側からの働きかけによって促進されたのであり、ウーミディからフィオレンティーナへの変化はそれを示す一例といえるだろう。しかしそれはいわゆる「十六世紀の退廃」としてではなく、政体が変わったことから来る自然な変化、宮廷社会という新しい社会における新しいタイプの文化の誕生として捉えるべきであろう。<sup>(6)</sup>

(1) 松本、「十六世紀におけるフィレンツェ公国の政治構造」二二頁、Diaz, *op. cit.*, p. 77; Spini, "Introduzione

generale", p. 16.

(2) 実際アカデミアは、フィレンティーナとなった後も次々と新入会員を迎え、ほとんどフィレンツェの全知識人を含むほどの規模となった。一五四四年末までに、規約に記された会員は二〇八名に上る。

(3) M. Fantoni, *La corte del Granduca*, Roma, 1994, p. 24.

(4) アカデミア・デル・ディゼーニョのことは、K. E. Barzman, "Liberal Academicians and the New Social Elite in Grand Ducal Florence", in *World Art. Themes of Unity in Diversity. Acts of the XXVth International Congress of the History of Art*, vol. 2, The Pennsylvania State University Press, University Park and London, 1986, pp. 459-463; S. Bracelli e A. D'Alessandro, "L'Accademia de-Il'Arte del Disegno di Firenze: prime ipotesi di ricerca", in *La nascita della Toscana*, Firenze, 1980, pp. 129-158; D. Heikamp, "Appunti sull'Accademia del Disegno", in *Arte illustrata*, Vol. 50, N. 50, 1972.9, 298-301; M. N. Jack, "The Accademia del Disegno in Late Renaissance Florence", in *Sixteenth Century Journal*, vol. 7, 1976; 3-20; Z. Wazbinski, *L'Accademia Medicea del Disegno a Firenze nel Cinquecento. Idea e istituzione*, Firenze, 1987 を参照。

(5) Cf. G. Benzoni, *Gli affanni della cultura*, Milano, 1978, pp. 78-143.

(6) ハルビン「宮廷社会」とは、まさにくノルベルト・エリアスが言ったところのものであるが、しかしフィレンツェの場合、封建貴族の欠如がエリアスのモデルの全

面的な応用を困難にしている。フィレンツェでは君主国になって始めて、「貴族」の存在を必要とするようになったのであり、まさにコジモの時代に「貴族」の定義が模索され、創られつつあった。(Cf. N. エリアス『宮廷社会』波田節夫他訳、法政大学出版局、一九八一年、Fantoni, *La corte del Granduca*, pp. 32-33)